

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

多文化社会アメリカ理解のためのトランクキット教材の開発と実践：博物館をトランクへ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森茂, 岳雄, 中山, 京子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001650

多文化社会アメリカ理解のためのトランクキット教材の開発と実践 ——博物館をトランクへ——

森茂 岳雄

中央大学文学部

国立民族学博物館先端人類科学研究部客員研究部門

中山 京子

京都ノートルダム女子大学

はじめに

- 1 多文化社会アメリカ理解の授業づくりの基本的視点
- 2 マルカルトランクの開発と基本的考え方
- 3 マルカルトランクの概要
 - 3.1 アフリカン・アメリカン・トランク
 - 3.2 ネイティブ・アメリカン・トランク
 - 3.3 エイジアン・アメリカン・トランク
 - 3.4 ミュージック・トランク〜ジャズ〜

3.5 メディア・トランク

- 4 マルカルトランクを活用した単元開発と実践
 - 4.1 単元開発の視点
 - 4.2 単元「ネイティブ・アメリカンからの手紙」の構想
 - 4.3 授業実践：「インディアンからのメッセージ」
- おわりに

*キーワード：多文化社会アメリカ理解教育，トランクキット教材，マルカルトランク，ハンズオン，ロックアート

はじめに

今日、学校と博物館をつなぐメディアとして、全国のいくつかの博物館ではテーマに従ってさまざまなモノを集めて、その解説や使い方のガイド、それを用いた授業案例等をトランク等にバックした「アウトリーチ教材」の開発が行われている。国立民族学博物館でも、国際理解（異文化理解）のための貸し出し学習キット「みんぱっく」の企画・開発が行われ、実験的運用を経て2004年度から本格運用が開始され、現在国別に6バックの貸し出しがおこなわれている。

アウトリーチ教材は、本来博物館と学校をつなぐメディアとして開発されたものであるが、今日このような国際理解（異文化理解）のためのアウトリーチ教材開発の試みは、博物館を越えて、NGO／NPO、民間研究団体等さまざまな機関・団体によって行われてきている。例えば、日本国際ボランティアセンターの「カンボジアの箱」「ベトナムの箱」「ラオスの箱」「パレスチナの箱」、開発教育協議会の「バングラディッシュボックス」、豪日交流基金の「オーストラリア発見キット」、神奈川県国際交流協会のスーツケース教材「カレーキット」等によく知られている。

これらは直接博物館と連携して開発されたものではないが、博物館の展示物及びその他のメディアを学習キットとしてトランクやボックスに詰めたもので、その意味で移動する小さな博物館といってもよい。

本章では、多文化社会米国理解教育研究会（代表：森茂岳雄）が開発した多文化社会米国理解のためのトランクキット教材「マルカルトランク」の開発とそれを用いて行われた実践¹⁾の検討を通して、博学連携におけるトランクキット教材の意義と課題について論ずる。

1 多文化社会アメリカ理解の授業づくりの基本的視点

多文化社会アメリカを理解する視点には、エスニック、ジェンダー、ハンディキャップ、社会階層、宗教等、様々な切り口がある。それらの中で、本研究会では、特に「エスニック」に焦点を当て、アメリカを構成する多様なエスニック・グループの人々の生き方や暮らし、それらの人々の歩みや彼らが生み出した文化を学習するための単元開発と実践を行い、その実践の意義や可能性を検証することを目的とした。

単元開発と実践にあたっての主要な課題意識と特色は以下の三点である。まず第一に、これまでの国際理解（異文化理解）教育の実践に対してしばしば言及されてきた批判、すなわちその実践によってある国や民族についてのステレオタイプで、本質主義的な認識が学習者に再生産されてしまうという批判にどうこたえるかという点である。この点については、近年の文化研究において本質主義批判にたって構築主義的な文化理解を提示しているカルチュラル・スタディーズやポストコロニアル批評に学んで、「構築主義的授業づくり」という新しい考え方を提案した。

第二に、そのような授業づくりを支え、児童生徒が興味を持って学習に取り組めるような教材の開発である。単元開発に当たっては、開発者自身がアメリカにおいてフィールドワークを行い、多文化社会アメリカを体験的・実感的に理解するとともに、そこで収集したモノ、映像や音声資料、図書資料等を学習テーマに合わせて分類し、児童生徒の感性に訴えて深く思考できるようなアウトリーチ教材（本章で紹介する「マルカルトランク」）を開発した。

第三に、児童生徒のアメリカ理解をどのように自分達の身近な問題と結び付けていくかという点である。同心円拡大主義の内容構成に基づいた従来の日本の社会科教育においてしばしば指摘されてきたことは、



写真1 マルカルトランク

学習内容が地域→日本→世界と拡大するにつれ身近な問題に対する認識が抜け落ちてしまうという問題である。これは国際理解教育においても同様である。そこで、本プロジェクトの単元開発に当たっては、多文化社会アメリカの歴史的形成や現実の理解をめざすとともに、その学習が単に他国理解（異文化理解）としてのアメリカ理解に留まらず、それを通してグローバル化の進展の中で多民族化が進行している今日の日本や身近な地域における多文化共生のあり方につながるような授業づくり（異文化理解教育と多文化教育のインターフェイス）と実践をめざした。

2 マルカルトランクの開発と基本的考え方

本単元開発に当たっては、アメリカの多文化社会を児童生徒が興味を持って学習に取り組めるように、学習者の感性に訴え、深く思考できる教材としてトランクキット教材「マルカルトランク」(“Multicultural Trunk”から命名した。)の開発を行った。トランクキットは、もともと博学連携の一つの具体的ツールとして欧米の博物館において展示物やそのレプリカなど、触れることができ（ハンズオン）貸し出し可能な収蔵品をトランクに詰めて教育・普及活動の一環として貸し出すことを目的としたアウトリーチ教材である。

現在、前述したように日本においてもいくつかの博物館でこのようなアウトリーチ教材が開発されている。本単元開発においてもこれらのアウトリーチ教材のコンセプトに学びながら、アメリカにおける調査を通して多文化社会アメリカを学習者が興味を持って主体的に学べるようなモノを収集し、学習内容に合わせた数種類（エスニック別、テーマ別）のトランクキットを開発した。特に後述するネイティブ・アメリカンに関する教材の収集に当たっては、アリゾナ、ユタ、ニューメキシコのリザーベーションにあるネイティブ・アメリカンの文化センターや博物館を訪れ、その展示物や収蔵物を参考にコンテンツを考えた。

本トランクキット教材の基本的コンセプトは次の5つである。

1. 感性（視覚、聴覚、触覚等）に訴える教材（感性教材）
2. 実際に触れて、操作できる教材（ハンズオン教材）
3. 興味や関心応じて多方面に発展可能な教材（発展教材）
4. 教師の教材研究や具体的な活用を支援する教材（支援教材）
5. 日々増殖し、進化する教材（増殖教材）



写真2 マルカルトランクのロゴ

1. と2. については、本教材の中にはDVD, VTR, CDのような視聴覚教材, 楽器や玩具など, 演奏したり操作したりする実物教材 (モノ) が含まれている。それらは人間の感性を刺激し, 豊かな認識へと導く。また感性もそれら教材の鑑賞や操作を通して磨かれる。

3. については, 興味や関心は一人一人の児童生徒によって異なっている。トランクキットの中の多様なモノはそのような児童生徒の多様な興味に合わせて活用できる。また, モノ自体が多様な領域と多様な操作性 (活動可能性) を持っているため, 内容においても活動においても発展可能性を持っている。

4. については, マルカルトランクの中には, 児童生徒の学習支援のための教材だけでなく, 教師が教材研究するための参考資料 (図書, 映像) や学習指導案例等も入っている。

5. については, トランクキットの中身は固定したものではなく, 絶えず新しい教材を追加し, 増殖・進化するものであるということである。場合によっては児童生徒が見つけてきたものや, 学習活動によって生み出された生徒の作品もトランクキットのコンテンツとなる。

国際理解教育は単なる知識・理解の教育ではない。それはグローバルな価値の実現や多文化共生に向けて行動できる市民としての資質育成をめざす実践的教育方略である。このような資質は単なる知識・理解の学習だけでは育成できない。そのような行動的, 参加的な市民的資質の育成には, 学習過程において参加的な意思決定過程を大切にしながら多様な学習活動が工夫されなければならない。

そこで, 授業づくりにあたっては下記のような多様な学習活動を取り入れた。

1. ロールプレイ, シミュレーション, ランキング, ディベート, ピクチャー・アナリシス, インタビュー, ものづくり等々
2. 多文化マップづくり
3. 多様なプレゼンテーション (レポート, 創作社会詩, 演奏, ペインティング, パワーポイント等々)

トランクキット教材は, このような, 多様な学習活動の展開を支援する道具ともなりうる。

3 マルカルトランクの概要

以上の視点にたって多文化社会アメリカを主体的・参加的に学べる教材をトランクに詰め, 小学校から高等学校までの教科学習や「総合的な学習の時間」における学習活動でできるように, 提案授業案を含めて貸し出し教材として整備した。

現在貸し出し可能なトランクは, エスニックをテーマにしたものとしては, 「アフリ

カン・アメリカン・トランク」「ネイティブ・アメリカン・トランク」「エイジアン・アメリカン・トランク」の三種類、トピックをテーマにしたものとしては、「ミュージック・トランク」「メディア・トランク」の二種類である。²⁾

以下、各トランクの概要を簡単に紹介する。



写真3 マルカル・トランクの内容 (教材)

3.1 アフリカン・アメリカン・トランク

アフリカン・アメリカン・トランクにはアフリカ系の人々の歴史的経験や現在の生活にかかわるモノを詰めた。奴隷制から公民権獲得にいたるまでのアフリカ系の人々の経験や運動、彼らが生み出した音楽、ニューオーリンズのクレオールのようにアフリカ系と他の文化が接触することによって生まれた新しい文化を象徴するものなど、多様な視点から教材となるものを選定した。

子どもたちがなにげなく手にするものも多文化社会を考える教材となる。例えば、バービー人形などは、様々な人種・民族を意識していることはよく知られている。子どもを対象とした読物にも多文化的視点が反映されている。右の布製の人形



写真4 アフリカン・アメリカン・トランク

はプランテーション時代のアフリカ系とヨーロッパ系をモチーフにした白黒のリバーシブル人形である。

トランクの中の1枚の風刺絵や挿絵、絵画から、人種差別の問題や多文化社会を考える学習を展開することが可能である。情報が溢れている現在、それらの情報を批判的に読みとく力（メディアリテラシー）を身につけることは大切である。

また、公民権運動の父と呼ばれるキング牧師に関する資料を充実させた。演説ビデオ、ライフヒストリー、アニメーションビデオの他、本、児童図書、演説文書などがあ

る。英語、及び社会科、公民科の授業などで「キング牧師」が取りあげられることが多いが、その際の副教材として活用が期待できる。

3.2 ネイティブ・アメリカン・トランク

ネイティブ・アメリカンは、狭義には「インディアン」と称され、日本でも映画や物語、童謡の中で親しまれてきた。しかしその中で描かれる人々の多くは、頭に羽飾りを付け、弓矢を背負い、勇ましく戦闘的なイメージのものが多かった。このトランクでは、このようなステレオタイプを崩し、反省的な自己認識を促すために、ネイティブ・アメリカンの豊かな文化や精神世界を示す素材に加え、現在の人々の暮らしを伝える素材を多く揃えた。

現在のネイティブ・アメリカンの人々の生活や現実の姿が日本に伝わってくることは少ない。現代のアメリカに生きる彼ら／彼女らの姿をさぐる視覚的な資料を用意した。

アナサジが岩肌に残してきたロックアートの文化は、観光地などで過去の財産として見られるだけでなく、現在のネイティブ・アメリカンにも息づいている。ロックアートのレプリカ、ロックアートが描かれた壺（本物）、カチーナ人形、楽器等、豊かに継承されてきた文化を伝えるもので構成される。



写真5 ネイティブ・アメリカン・トランク

3.3 エイジアン・アメリカン・トランク

このトランクには、日本と関係の深い日系人に関する資料、及びアメリカ各地にチャイナタウンを形成している最大のアジア系集団である中国系に関する資料を主に集めた。日本からアメリカに渡った日系移民の歴史的経験について、日本の子どもたちが学ぶ機会が少ない。これからのグローバル社会を生きる子どもたちに、「移民」について学ぶことは、自分達の身近な地域に移住してきた外国人との共生を考える一歩である。

本トランクには、現地で収集した文献資料や映像資料の他、日本の学習者を想定して著者らが作



写真6 エイジアン・アメリカン・トランク

成した日系移民に関する紙芝居やカルタ³⁾を含めた。

3.4 ミュージック・トランク〜ジャズ〜

多文化社会アメリカを象徴する音楽として、特にジャズをテーマにトランクキットを構成した。

ジャズは、19世紀の後半、ニューオーリンズの小さな広場で生まれた。アフリカからの黒人奴隷たちが日曜日の午後に集まり、ドラム、管楽器とともに歌や踊りを楽しむことから始まった。アフリカのドラム音楽とヨーロッパ音楽、さらに当時ミシシッピ地域ですでに親しまれていたブルースとが、混じりあい、独特のサウンドが生まれた。先祖から伝え聞いたアフリカのリズムが、ブルース、賛美歌、黒人霊歌、カントリー、西洋クラシックや行進曲の影響を受けて変化し、19世紀に発展したのがジャズである。



写真7 ミュージック・トランク

このトランクでは、ポスターや絵はがきにもなっている「クッキング ウィズ ジャズ」(Cooking with Jazz)を「文化の融合」の表徴としてとりあげ、教材を集めた。

「Cooking with Jazz」を表現したポスターをはじめ、ジャズを通して文化融合について考えるための楽器、CD、本、地図等を用意した。

3.5 メディア・トランク

映画やテレビ番組、テレビコマーシャル、文学など、さまざまなメディアから多文化社会アメリカに迫るトランクである。英語、総合的な学習の時間での活用を想定している。アフリカ系、メキシコ系移民をめぐる学校内や社会での問題を視聴覚資料を通して考えることができる。



写真8 メディア・トランク

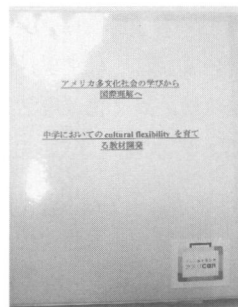


写真9 教師用手引きファイル

本トランクには、トランクに含まれるさまざまなメディアを活用した1次から7次までの詳細な授業案を含めた。これらの授業案には、目標や展開例の他、各時間で使用するビデオや資料について詳細な説明を付した。7次までの大きな連続した学習を提案しているが、学習内容や対象によって、部分的にとりあげて使用することも可能である。

次節では、以上のマルカルトランクの中からネイティブ・アメリカン・キットを活用して行われた小学校の実践を紹介する。

4 マルカルトランクを活用した単元開発と実践

4.1 単元開発の視点

現在、小学校の国際理解教育においては、地域や日本と経済的・文化的に関わりの深い国々について取り上げる実践、地域の多文化共生の課題に応える実践が多く見られる。一方で、メディア環境が整う中で、子どもが現実かどうかさえ解らない遠くの話や不思議に思う物事について見聞きする機会が増え、それに興味関心をもつことも事実である。子どもたちが好むディズニー映画にも度々登場するネイティブ・アメリカンは、「インディアン」⁴⁾として子どもたちも見聞きしている人々である。小学校2年生の図工の教科書にもカラフルな衣装を身につけて踊っているネイティブ・アメリカンの子どもの写真が掲載されている（開隆堂 2002：裏表紙）。

多くの子どもが幼稚園で「10人の小さなインディアン」を歌ってきている。ある小学校では、1年生を対象として実施した10回連続シリーズの英語学習活動の中で、第3回目の数をテーマとした時間において、「Ten Little Indian Boys」を歌う場面を設定し、以後、第10回まで毎回復習のためにこの歌を歌う指導をしている⁵⁾。また、別の小学校ではネイティブ・アメリカンを取りあげて、「総合的な学習の取り組み」として1年生と6年生と一緒に「10人の小さなインディアン」の歌と踊りの発表している。その感想には「十人のインディアンを一年生と一緒に踊りました。インディアンの踊りはかんたんだったけど恥ずかしかったです」と記されている⁶⁾。この歌の原曲は、アメリカにおける白人開拓農民によるネイティブ・アメリカンの迫害が続く1868年にアメリカ人セブティマス・ウイナーによって作られ、10人のインディアンが最後にはいなくなるという歌詞がついていた。日本ではアメリカ民謡として流布し、教育の文脈においては、数え歌、英語教材、異文化理解活動としてこの曲の背景を考えるとなく使用されている実態がある。清水智久は、NHKの「おかあさんといっしょ」で「インディアンが通る、アッホイ、アッホイホ」が歌われ、「ちびっ子のど自慢」は「アパッチ・アワウ」を生みだし、流布している「10人のインディアン」が肉体的絶滅と文化的絶滅を歌っていることに無自覚であることを等について、日本人が白人の目を通してネイティブ・アメリカンをとらえていることを指摘している（清水1971：10）。そして清水は「インディ

アンに関してほど、幼児期から偏見が植え付けられる例は他にないのではないか。かなり誇張した表現になるかも知れないが、日本人の人種的・民族的な差別や偏見は、まず幼児期でのインディアン蔑視から出発すると見てもよいだろう。なぜ子供たちは『インディアンごっこ』であそばねばならないのか。子供たちの世界から、インディアン蔑視を生み出すもろもろの歌や遊びを一扫しなければならないと著者は考える」(清水 1971 : 11) と述べている。清水のこの指摘に関連して、アメリカ・インディアン研究の第一人者である富田虎男は、1971年に小学生の子どもにいくつか質問をしたが、その時返ってきた答は、裸で森林や平原に住み、野獣を狩り、幌馬車を襲う、ハリウッド製西部劇のインディアン像であり、10年後同じ問いを中学生に質問したが、答えはほとんど変わらなかったとしている(富田 1982)。清水らがこの指摘をしてから30年以上経過した現在でも状況はそう変わっていない。

小学校2年生児童115人、6年生児童120人、大学生47人を対象に著者が行ったアンケート調査⁷⁾によれば、2年生の約4割の子どもが「10人のインディアン」の歌を記憶していることがわかった。また、6年生になると約2割の子が、インディアンが先住民であることを知識として知っていることがわかった。興味深い記述として「カウボーイによって絶滅されたから今はもういない」「昔はいた」という記述があった。なぜすでに存在しない人々と考えているのだろうか。

大学生の記述においても、問2「アメリカには先住民がいますか」で「はい」と回答した場合、知っていることを記述する項目では、ほとんどが「インディアン」と単語で記述した。二文以上で回答したものには、西部開拓時代に関する知識はあるようだが、現代のネイティブ・アメリカンの生活や課題に関する記述は皆無であった。2年生の児童への面接式のインタビュー調査の結果、「インディアンは物語の世界の人々であり、ジャングルや森に住み、こわい感じの人々」という認識をすでにもっていることがわかった。地域の多文化社会の構成員として生活圏には実在しないが、メディアを通してステレオタイプな認識をしているのである。ネイティブ・アメリカンに関するステレオタイプと映画について、デイ・多佳子は、アメリカの邦語新聞に掲載された若い日本人女性のネイティブ・アメリカンについての無知を例にあげ、「インディアンたちは男女とも、非現実的な過去の世界、それも実に一面的な過去に生きることを余儀なくされてきた」と指摘している(デイ 1998 : 13-14)。

このような子どもたちのネイティブ・アメリカンに対するステレオタイプな認識をふまえ、子どもにとっては身近な存在ではないネイティブ・アメリカンをあえてとりあげて単元開発をし、自分の異文化認識に対して見直しをする場面を設定し、異文化理解への姿勢の問い直しをはかりたいと考えた。子どもにとって身近な存在ではないネイティブ・アメリカンについて興味をもって主体的に学ばせるためにマルカルトランクを用いた。

4.2 単元「ネイティブ・アメリカンからの手紙」の構想

多文化社会アメリカを理解するために、ネイティブ・アメリカンを取り上げることに
ついては以下のように考える。まず、他のエスニック・マイノリティについては一般の
メディアにのることも多く、教材開発も進んでいるが、ネイティブ・アメリカンについ
ては理解を深める機会が日本ではほとんど無いことが挙げられる。そのためか、日本の
子どもたちの中にはネイティブ・アメリカンに対する本質主義的な認識が見られる。そ
れに対して働きかけ、その認識を変容させる必要がある。次に、ネイティブ・アメリカ
ンの歴史的経験を知ることは多文化社会米国が生成される過程を理解することであり、
他のエスニックとの関連性が話題になる。最後に、先住民という視点から日本の多文化
社会を構成するアイヌなど日本の先住民について考える契機にもなる。

本授業づくりでは、「多文化社会アメリカの構成員であるネイティブ・アメリカンに
着目し、トランクキット教材を手がかりにしてアメリカの多文化社会生成過程における
彼らの歴史的経験、文化伝承、現在の人々の暮らしについて理解する。また、『先住民』
への気づきから日本国内の先住民についての関心をもつ」ことを目的としている。本
節では、幅広い発達段階の児童生徒を対象として提案し、実践者が担当する学年に即し
て、学習用トランクキットのモノを使いながら選択的に事例を取りあげて実践をつくる
ことを意図している。構想した学習計画は次の通りである。

(1) 学習活動名

ネイティブ・アメリカンからの手紙

(2) 目標

- ・多文化社会アメリカに生きるネイティブ・アメリカンに興味関心をもち、理解を深めようとする。
- ・トランクキット教材を手がかりにして多文化社会アメリカにおける彼らの歴史的経験、文化伝承、現在の人々の暮らしについて理解する。
- ・「先住民」としてのネイティブ・アメリカンへの気づきから日本国内の先住民についての関心をもつ。

(3) 対象学年と教科

小学校：総合的な学習の時間

中学校：音楽、社会、美術造形、総合的な学習の時間

高等学校：地理、世界史、公民、音楽、美術、総合的な学習の時間

(4) 学習活動内容

次に示す展開計画は、十分な学習活動時数が保障されていることを想定した理想としての提案である。しかし実際には取り組む教科、対象とする学年、時数によって弾力的に運用する必要がある。そこで、〈導入〉〈展開〉〈まとめ〉〈発展〉の活動において、展

開の部分を選択して展開計画を構想するものとする。また、授業者はこの提案を参考に、対象学年に応じて自由に展開計画を加筆修正して作成し、実践にあたることを前提とする。本学習活動を通して、ネイティブアメリカンに関する認識の変容を促すとともに、日本国内の先住民やマイノリティについての気づきや認識の深まりが見られることを期待したい。そこで、実施する学年によって可能な限り⑧「先住民との交流」の学習を含めたい。

活動名	ねらい	領域時数	活動内容	マルカルトランク教材
〈導入〉 ①インディアンとは誰のこと？	「インディアン」と呼ばれる人々がアメリカに住む先住民であり、その中でも多様な部族があり、抑圧された歴史的経験をもつことを知る。	総合 英語 1時間	・コロンブスがアメリカ大陸をインドと誤認した時に、先住民を「インディアン」と呼んだことに由来すること、当時のコーンハーベストが現在のハロウィンの祭りにつながっていることを知る。 ・シンボルマークを手がかりに、複数部族があり、多様性があることに気づく。 ・「十人の小さなインディアン」の音楽からインディアンへの偏見や差別を読みとり、抑圧された経験をもつことを理解する。	・児童図書 ・インディアン地図 ・鮭、シャチ、鷲をモチーフにしたマーク ・ミニトームボール ・♪Ten Little Indianの歌詞
②ロックアートに挑戦！	ロックアートを手がかりに、ネイティブ・アメリカンが長い歴史をもち、豊かな文化を継承してきたことを理解する。 ・ロックアートを体験的に楽しむ。	図画工作 美術 総合 2時間	・アナサジ以来描かれ続けたロックアートから、アメリカ先住民の長い歴史と、彼らが自然を尊重しながら豊かな文化を継承してきたことに気づく。 ・ロックアートの解説やロックアートの図柄を使ったメッセージづくりに挑戦し、ロックアートを楽しみながら彼らの精神文化に触れる。 ・日本でもアクセサリーなどの図柄に使われていることを知り、文化の共有を実感する。	・アナサジ族資料 ・ロックアート解説本 ・ホビ族陶器ロックアート解説表 ・アクセサリー
③祈りの民	ネイティブアメリカンの人々が「祈り」を重んじ、精神世界を大切にしてきたことを理解する。	音楽 総合 1時間	・戦闘的なイメージが強いネイティブアメリカンが実は祈りや精神世界を大切にする人々であることを知る。 ・祈りの表現方法をCDやビデオなどから知り、楽器を使って演奏してみる。	・児童図書 ・ビデオ ・マラカス、太鼓、笛 ・カチーナ人形
④つくられた虚像	映画に描かれるネイティブ・アメリカン像について追究し、虚像やステレオタイプについて考える。	情報 総合 1時間	・西部開拓映画やマンガに描かれる姿について意見を出し合う。 ・「戦闘的なイメージ」ができた背景をさぐり、それらについて分析された文章を読む。 ・特定のマイノリティの人々を描くときの危険性や受け止める側の配慮について考える。	・ビデオ ・挿絵 ・映画分析記事
⑤住居の建築	部族により自然環境や生活様式に応じた住居の建築文化をもっていたことを知る。	美術 総合 技術家庭科 1時間	・ホビのホーガン、平原インディアンの移動式テント（ティービー）、プエブロの日干し煉瓦建築などを、資料を手がかりに整理し、なぜその様な住居が発達したのか考える。 ・実際に住居をつくってみる。（原寸もしくはミニチュア模型）	・写真集 ・絵はがき ・児童用工作本（プエブロインディアン）

⑥差別との闘い	土地の返還や権利を求めて運動する人々の姿から、差別と戦い続けていることを知る。	公民総合 1時間	・ネイティブ・アメリカン土地保有変遷図から、いかに土地を取奪されてきたかを知る。 ・流入移民の流れにおける白人との戦闘、黒人奴隷を用いた部族についてその背景を探る。 ・保留地内への第二次世界大戦中の日系人強制収容所設置をめぐる問題について考える。生活環境改善や土地返還運動に携わる人々の主張を理解する。	・アルカトラズ島説明本 ・児童図書
⑦現代の暮らしの断片	現在のネイティブ・アメリカンの人々の暮らしの一部を知る。	公民総合 1時間	・保留地内で生活する人、都市部に出て生活している人、インターマリッジをして生活している人々の暮らしをつたえる写真や映像資料から、現在の様子について理解を深める。 ・保留地という言葉の意味を理解し、そこで暮らすことについてディベートをする。〔「保留地は必要であるか否か」〕	・ビデオ記録「私はインディビノ」 ・写真集
⑧先住民の交流	ネイティブ・アメリカンとアイヌ、琉球の人々との交流活動から、日本国内の先住民について関心をもつ。	公民総合 1時間	・ネイティブ・アメリカンとアイヌ、琉球の人々との交流活動の様子を資料や映像から知る。 ・マイノリティである先住民同士が交流することの意味やその主張について考える。 ・日本の先住民、マイノリティについて考える契機をもつ。	・新聞記事 ・ビデオ ・資料「国際先住民年」 ・児童図書
〈まとめ〉 ⑨シアトル酋長の手紙への返事を書こう	自らの想いや考えをシアトル酋長の手紙に応える形で表現する。	国語総合 1時間	・日本人に馴染みあるシアトルの地名の由来になったシアトル酋長が書いた手紙の意味を読みとる。ネイティブ・アメリカンや先住民について学んだことや考えたことを含めて、シアトル酋長の手紙に応える形で表現する。	・シアトル酋長の手紙
〈発展〉 ⑩表現しよう	学習内容・自らの考えを自由に表現する。	総合 2時間	・博物館的展示、劇、紙芝居、レポート製作など、自由な表現形態で学習の足跡を表現し、発表する。	

4.3 授業実践：「インディアンからのメッセージ」

実践「インディアンからのメッセージ」は小学校2年生を対象にネイティブ・アメリカンが保持し続けた文化であるロックペインティングの活動を中心に実践を行った（栗津潔，NARA探検隊編 2002，Sundstorm 2004，Hirschmann & Thybony, 2002，Kelen & David Sucec eds. 1996）。（本実践では，ネイティブ・アメリカンの呼び方については，対象が小学校低学年という発達段階であることから「インディアン」としている。）授業は，ロックペインティングの活動からはじめ，図画工作，道徳，国語の時間で，合科的に構成し，先の活動展開案の②③④⑦⑩を部分的に選択した展開となった。展開の詳細を以下に示した。

1. 単元名（活動名） インディアンからのメッセージ！	
2. 対 象：東京学芸大学附属世田谷小学校 2年生39名 授業者：中山 京子	
3. 教科領域との関連性： 低学年総合学習（本校は低学年2年間、すべての教科領域を包括する形で総合学習を実施している。従って、本実践は総合学習として実施。教科領域としては図工、国語、道徳と関わりが強い。）	
4. 実施時期：2004年3月	5. 総時数：7時間
6. 単元（活動）目標： ・ ロックアートの活動を通してネイティブ・アメリカンの文化にふれ、作品づくりを楽しむ。 ・ 自分達もっているイメージに偏りがあることに気づき、その原因を探るとともに、現在のネイティブ・アメリカンの人々の生活を知ろうとする。 ・ ロックアートの作品を通して交流をする。	7. キーワード ・ ネイティブ・アメリカン ・ 異文化認識 ・ ロックアート ・ 認識変容
8. 単元について（教材観・単元設定の理由・国際理解教育の視点など） 本学習活動は、子どもたちのネイティブ・アメリカンについての認識を変容させることを目的としている。子どもたちは実際に身近に存在しないネイティブ・アメリカンについて「物語の人物」「羽飾りを身に付けている」「木々がうっそうと生い茂る森に住んでいる」「黒い肌の色」「火の周りで踊っている」「アフリカに住む」「恐ろしいイメージの人」というイメージもっていることがアンケートやヒアリング調査を通して分かってきた。 なぜ、出会ってもいないネイティブ・アメリカンについてこのような認識もっているのか。そこには、子どもを取り囲むメディア環境が要因していた。「インディアン」像が映画や挿絵などのメディアによって構築されているのである。このことは学習活動を通して、子ども自身も気が付いていくことができる。特定の情報源や立場からの情報では、誤解を生むことに気づくことも国際理解をはかる上で重要な点である。 子どもたちの生活を中心にカリキュラムを構成する同心円拡大主義にもとづいたカリキュラムでは、おそらくネイティブ・アメリカンは学習の場に登場することはないだろう。しかし、子どもは既に誤った認識もっている。子どもの生活圏に存在しないからこそ、偏った、もしくは誤ったイメージをメディアから構築してしまっているのである。つまり、国際理解教育において、人、モノ、情報がボーダレス化している現代、同心円拡大主義にもとづくカリキュラム構成だけでは、不十分なのである。 本活動では、ネイティブ・アメリカンのロックアートに親しむ活動からはじめ、ロックアートの作品を作った実在するホピ族のお年寄りを手がかりに、現在のネイティブ・アメリカンの生活を知り、これまでの認識について考える場を設定し、子どもが自らの異文化に対する認識の変容に気付くような授業構成をしたい。そし	

て、子どものネイティブ・アメリカンについての認識の変容を追う。		
9. 連携（関係性）について： （T T, ゲストティーチャーなど単元実施や活動に関わった人や機関など、連携に関する情報） ・『Mulcul Trunk アメリ can（ネイティブ・アメリカン・トランク）』使用（多文化社会米国理解教育研究会作成） ・ネイティブ・アメリカン陶芸家（アメリカ在住）		
10. 展開計画・展開記録		
次・時	主な学習活動と子ども（学習者）の意識	○留意点
1 時間目	(1) インディアンはどんな人？ ・羽の飾りを付けている人。 ・口に手を当てて火の周りで踊っている。 ・お話に出てくる恐い人。 ・顔が黒い。 ・絵本『リトル・ムーン』を読もう。 ・カチーナ人形を見てみよう。	・子どもが認識しているままのインディアン像を引き出すために、どんな言葉も取り上げるようにする。 
2,3 時間目	(2) ロックペインティングに挑戦！ ・このマークの意味が分かるよ。絵がかわいい。 ・天気や動物など自然に関わる絵が多い。 ・マークを使って物語を作ってみよう。 こうやってメッセージを残したんだね。 ・壺のデザインを真似してみよう。 (3) インディアンは今も生きている！？ ・この壺を作った人は今もいるの？ ・つばについている手形は孫の手をかたどったの？ ・物語の人、昔いた人だと思っていた。 ・アメリカにいる！？アフリカじゃないの？ 写真のおばあちゃんはほくのおばあちゃんに似ている。 ・先生は本当に出会ったの？	・ホピのカチーナ（精霊）人形と絵本を手がかりに、インディアンの人々が自然を大切にしている人々であることを理解できるようにする。
4 時間目	(4) おばあちゃんが想像していた人々と違うのはなぜ？ ・今まで本当の人に会ったこともテレビとかでもみたことがなかったから。 ・ディズニーのビデオに出てくるから覚えた。 ・お話で聞いたり絵本の中の絵で見たりして知って	・「どうしてそう思うようになったのか」と問いかけることによって、子ども自身が自分の誤認識に気づいてその背景

次・時	主な学習活動と子ども（学習者）の意識	○留意点
5 時間目	いる。 (5) アニメ映画の中のインディアンと実際のビデオの人々の様子を比べてみよう。 ・ピーターパンに出てくるインディアンはイメージ通りだった。 ・今のビデオの中の人たちは特別に大事な日にインディアンの格好をしている。 ・普通の服を着ているよ。子どもたちが学校に通っているんだ。バスケットをしている。同じだ！ ・テントじゃなくて家に住んでいる。車もあるよ。 ・英語を話しているけれど、別の言葉もあるらしい。	を探ろうとする意欲を大切にする。 ・提示するビデオや資料は様々な生活場面が映されているものを選ぶ。祭りの日パウワウの映像だけをクローズアップしないように留意する。
6 時間目	(6) おばあちゃんに作品を送ろう。 ・アメリカに住んでいるおばあちゃんに本当に届くの？ ・おばあちゃんが子どものことを大事に思っているから、僕たちの気持ちとどくよね。	
7 時間目	・精霊とか自然を大事にしているから、そのペインティングをしよう。 ・物語をつくって送ろう。読みとってもらえるかな。	
11. 評価計画： ○体験目標：ロックアートの活動を通してネイティブ・アメリカンの文化に触れ、作品づくりを楽しむことができる。（評価方法：言動、感想文） ・知識目標：自分達のこれまでのイメージに誤りがあったことに気づき、彼らの現在の生活の一部を知ることができる。（評価方法：言動、感想文） ・技能目標：ビデオや本やモノから調べて、自分の考えを表現することができる。（評価方法：言動、感想文） ・態度目標：異文化に対し、既存のイメージにとらわれずに異なる見方をしたり、自分で確かめてみようとしたりすることができる。（評価方法：言動、感想文）		
12. 苦勞した点	13. 改善するとしたら 小学校高学年の子どもたちを対象にして、同じ実践をすることができたら、国内の先住民であるアイヌ、琉球の人々の歴史的経験に振り返って考えていける場を設けたい。	
ロックアートに描かれている絵は原始的でシンプルな描き方が多く、低学年の子どもが描く絵と似通うところがある。そのせいかロックアートの活動は子どもが予想以上に興味関心をもって取り組んだ。一方で、相対的		

なものの見方が発達途上の小学校2年生という発達段階の子どもに対し、異文化認識の変容をうながすためにどのような情報や視聴覚素材を用意したら良いか、その選択に苦勞した。今回は、子どもたち自身の中から、自分達がイメージする要因はビデオあると言い出したことからアニメ映画を検証の手だてにすることができた。しかし、ネイティブ・アメリカンの現在の生活ぶりや直面している問題について、2年生の子どもには、それらを十分に示すことができなかった。また、本質主義的な認識とビデオを見て気付いた事柄に関して、深めたいと思う部分は多々あったが、平易な言葉を使って説明しきれないところがあった。	また、今回、小学生でもネイティブ・アメリカンを事例にして異文化認識の変容を子ども自身が実感することができることが明らかになったので、認識の変容をポートフォリオなどでより明確にその変容が記録できる手だてを考えたい。
---	---

おわりに—マルカルトランクの意義と課題—

最後に、本単元開発と授業実践におけるトランクキット教材（マルカルトランク）の意義と課題について、前述したマルカルトランクの基本的コンセプトに関連して論じたい。

マルカルトランクの基本的コンセプトの1.「感性教材」及び、2.「ハンズオン教材」については、マルカルトランクにはビデオや絵画等の視覚教材、CD等の音声教材、楽器等の直接操作できる教材が豊富に含まれており、生徒の主体的活動を促す感性教材として活用することができた。また楽器の他にも、ロックアートの模様が施された石片のレリーフや壺は、実際に手にとり、その重みやデザインを触って確かめたり味わったりすることができ、ハンズオン教材として有効であった。

3.「発展教材」という点については、学習者が小学校2年生であったことと、学習目標が明確な授業場面での使用に限られたため、本実践においては発展教材と言う意味ではマルカルトランクを使用できなかった。しかし、トランクの中には、ロックアート関係の素材の他、ネイティブ・アメリカンの楽器やネイティブ・アメリカンに関する児童図書や分布地図、映像資料などが多く含まれており、小学校高学年、中学生、高校生を対象にした学習では、学習者の課題意識の広がり、深まりによって音楽・国語・社会等、多方面に発展可能な教材を含んでいると考える。

4.の「支援教材」については、本授業実践者のようにネイティブ・アメリカンについて専門的な知識・理解のない教師が授業を行う場合、トランクキットに入っているも

のは教師が教材研究を行う上で大変有益であった。しかし、文献資料の中には英語のものも多く、教師の教材研究に資するためには翻訳を含めて読みやすさ、理解しやすさについて検討する必要があると感じた。

5. 「増殖教材」という考え方については、実践をして子どもが作ったロックアートの作品や感想文をトランクキットに収め、次に使用する際の具体的事例として役立てることができた。

使用を通して明らかになった課題についてトランクの内容を修正、追加し、トランクキットをさらに進化させた。これを繰り返すことで、より使いやすい教材になることが期待できる。

このトランクキットは、直接博物館と連携して開発されたものではないが、博物館の展示やその他のメディアの要素をトランクに収めることで、教室において、またその他の学びの場において手軽に小さな博物館を実現できるという意味で、新たな博学連携の可能性を示しているといえる。

註

- 1) 多文化社会米国理解教育研究会は、2003年度及び2004年度に国際交流基金日米センター（CGP）の助成を受けて、多文化社会アメリカに焦点を当てたアメリカ理解教育の単元開発と実践の研究を行った。トランクキットを用いた単元開発と実践の詳細については下記の報告書を参照のこと。多文化社会米国理解教育研究会（代表：森茂岳雄）編『多文化社会アメリカを授業する―構築主義的授業づくりの試み―』2005年1月、全173頁。
- 2) マルカルトランクの概要、貸し出し等については、<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~morimo/mulcul/>を参照のこと。
- 3) 本教材はJICA海外移住資料館の学習プログラム開発の一貫として、『学習活動の手引き』（2005年）とともに著者らが作成したものである。
- 4) 子どもの発達段階にあわせ、学習の中ではネイティブ・アメリカンについては「インディアン」と称した。なお、ネイティブ・アメリカン自身がインディアンと称することも多々あり、表現の仕方や場が適正であることが第一である。
- 5) この実践は、三重県一志町立川合小学校で2000年10月～12月に実践された。学習指導案「第1学年生活科（英語）学習指導案」はインターネット上（<http://engserve.edu.mie-u.ac.jp/~eg6005/kaoril.htm>）に公開されている。（2004年12月26日現在確認）
- 6) 大村市立中央小学校ホームページ（<http://www.oomurachuou-e.nagasaki-e.ed.jp>）において、「総合的な学習の取り組み」として1年生と6年生が「10人のインディアン」の歌と踊りの発表をした様子が紹介されていた。（2004年12月26日現在学校ホームページ閲覧不能）
- 7) 東京学芸大学附属世田谷小学校第2学年115人と第6学年120人、東京学芸大学教育学部第3学年47人へのアンケート調査を2003年12月に実施した。アンケートの内容と分析については、多文化社会米国理解教育研究会編、前掲書、2005年、24頁を参照のこと。

文 献

栗津潔, NARA探検隊編

2002 『ロックアート—神話そしてイマジネーション』印刷博物館。

デイ・多佳子

1998 『アメリカインディアンの現在—女が見た現代オグララ・ラコタ社会—』第三書館
pp. 13-14。

F. Hirschmann & Scott Thybony

2002 *Rock Art of the American Southwest* Graphic, Arts Center Publishing.

開隆堂

2002 『えのぐのぼうけん』図画工作1・2年下 平成14年度版 裏表紙。

Leslie Kelen & David Sucec eds.

1996 *Sacred Images : A Vision of Native American Rock Art*, Cibbs Smith Publisher.

Forrest Kirkland & W.W.Newcomb, Jr.

1967 *The Rock Art of Texas Indians*, University of Texas Press, 1967.

清水智久

1971 『アメリカ・インディアン—「偏見」からレッド・パワーまで—』中公新書 p.10, p.11。

Linea Sundstorm

2004 *Storied Stone: Indian Rock Art of the Black hills Country*, University of Oklahoma Press.

富田虎男

1982 『アメリカ・インディアンの歴史』雄山閣「はしがき」。